

伊豆沼・内沼

(いずぬま・うちぬま)

位置：北緯38度43分、東経141度06分／標高：6m／面積：559ha／湿地のタイプ：淡水湖／保護の制度：国指定鳥獣保護区特別保護地区／所在地：宮城県栗原市、登米市／登録：1985年9月／国際登録基準：2、3／EAAFPネットワーク参加地

湿地のタイプ：淡水湖



早朝、ねぐらにしていた沼から飛び立つマガン



伊豆沼(左)と内沼



内沼のハス



マコモを植える

湿地の概要：

伊豆沼・内沼は、宮城県の北西部、北上川の支流の迫川(はさまがわ)の沖積平野にある大小2つの淡水の沼。大きいほうが伊豆沼で、小さい内沼とは1本の水路でつながっている。周囲は一面の水田で、南・西・北の三方を標高30～50mの丘陵で囲まれている。

かつて一帯は北上川と迫川がぶつかる氾濫原で、広大な低湿地帯だった。1930年ごろからの干拓事業で湿地や沼の多くは水田に開拓され、東北地方有数の穀倉地帯となった。伊豆沼・内沼も一部が埋め立てられ、むかしの2分の1ほどの面積の灌漑用水池、洪水を調節する遊水池として残されたのが、いまの姿である。水深は平均1mほどだが、伊豆沼の東側にある水門によって洪水時の水位調整と農業用水管理がおこなわれている。

渡り鳥の越冬地：

この地域は雪が少なく、厳冬期でも日

中の気温が0℃以上で湖面が凍結しないため、冬になると多くの渡り鳥がおとずれる。周辺に採餌場となる広大な水田があるため、日本で越冬するマガンの80%以上、オオハクチョウ、コハクチョウなどがここを利用する、国内最大級の越冬地である。南側にある同じ条約湿地の蕪栗沼(かぶくりぬま)とは、越冬地として相互補完関係にある。

豊かな生物相：

伊豆沼・内沼は、水深が一番深いところでも1.6mと浅く、ヨシ、マコモ、オギ、ハス、ヒシ、ガガブタ、アサザなどの水生植物が豊富で、周囲を含めて約700種の植物が確認されている。夏には湖面をハスの花がおおい、毎年ハス祭りがおこなわれ、人々は沼に船を浮かべて観賞する。魚類はコイやフナを中心に36種。タナゴ類やメダカ、ジュズカケハゼなども生息する。トンボはオオセシジトトンボ、チョウトンボなど32種が確認されている。

住民参加：

伊豆沼の北岸にあるサンクチュアリセンターを中心に住民参加活動が活発で、水質浄化やハクチョウの餌として欠かすことのできない多年草マコモの植栽、ヨシ群落の刈り取りなどに、住民参加グループ「マコモ軍団」をはじめ地元の小学生や市民、NGOが積極的に取り組んでいる。

●関係機関

宮城県伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター
Tel: 0228-33-2216

